

語る女と、十二月の使者。

八百屋さん

第一章

「独白」

――なつかしい気持ち、思い出す痛み。

雪や音楽やさまざまの光、

そして何より僕たち自身が

僕たちにとって本当に話したいことを

ずっと、冬の雲のようにさえぎり、邪魔してきた。

十年先のクリスマス。

あのとき話せなかったことを、話そう。

第二章

「乾杯／人影と少女」

――あのさあ……

いやー、外、超寒いって！ 雪になるね、これは。
ううん、タクシーで来た。コート、そこにかけるの？
あ、でもまだちょっと着てるわ。なんか寒くって。

久しぶりだねー、いつ以来？ 同窓会以来？ほんと、久しぶり。
何にする？ もう頼んだ？ あそ、あたしもそれじゃビール。すいませーん、ビールもうひとつ。
他の奴らも帰ってきてんのかなあ。誰か連絡とってる？ あたしは全然。
そうだね、とりあえず飲もうか。ええと、乾杯。…何かに乾杯する？
じゃあ…メリークリスマス！！
ってまだ23日だっつうの。クリスマスイブイブだよ。イブイブ。言わない？
はいはい、それじゃ、何かに乾杯！

はあ、考えてみたら飲むの超ひさびさだわ。
高校のときはさー、何かっていうとマルの家に集まって、酒飲んでたよね。
あんなに騒いで、よく捕まらなかったなあ。
二階の窓からマルがぶらさがったりしてさ。バカだ。バカだよー。

なんか、部活仲間っていうより、バカ騒ぎするために集まった人ら、って雰囲気だったねえ。
マルとかさー、男子は、一年女子食っちゃうことしか考えてなかったでしょ、あれ絶対。
マルの所ってほら、下宿屋だった建物残ってたじゃない。
あの辺、自由に使ってたみたいよ、あいつら。だからー、食っちゃったりとかだって。
え、あたし？ 食ってないって。やってないって。

マルとはそんなんじゃなかったって本当。誤解されてるなあ。
だからやってないっての。
そうかなあ。全然、そういう空気もなかったと思うけど。
あたしも彼氏いたし、マルはあのとおりに、お盛んだったでしょ。ないって。ないない。

うん、あいつもてたからねえ。

ああいう、ちょっと頭良くて器用で、世の中ハスに見てるような奴がもててたよね。流行りだよね。

へんに突っかかってくる女とか、いたよ。いましたよ。

でも本当にあたしとマルはそんなんじゃなかったから。

好きだったかどうか、って言われると、どうかなあ。わかんないよ。

十年も前の話だし。

その時その時の気分で生きてたから。

みんなそうじゃない？ 高校ぐらいのときって。

*

ひそやかな鈴の音と共に、舞台が明るくなる。

無人の舞台。

ツリー、ポインセチア、紙の鎖、星、ろうそくといったクリスマスの飾りで溢れている。
中央にはやわらかそうなソファが一つ。

鈴の音は次第に大きくなり、それに合わせて一つの影が客席を通り抜けて風のように現れる。
人影はドラキュラのようなマントに身を包み、ファントムのような仮面で顔を覆っている。
影、客席に向かって語りかける。

――しんしんと、皆に等しく雪の降り積もる、清しこの夜。
――今宵はクリスマスイブです。

――誰しものが、小さな願いや希望を胸に眠り、
――それらの叶えられる朝を信じるのが許される、そんな夜。

――そう、誰しものが...
――サンタクロースを信じない歳になった皆さんも、きっと。

ピアノの練習曲のような音楽と共に、少女が舞台に出てくる。

少女、影に話しかける。

――影さん、こんばんは。メリークリスマス。
――いえ、今はまだクリスマスイブね。

――私もサンタさんを信じて待ってるほど子供でもないの。
――今夜は、一人でこの本を読んで過ごすつもりよ。

少女はソファに腰掛けて、抱えてきた本を開く。

そして物語を声に出して読み始める.....

――昔むかし、または遙か未来のことです。

第三章

「芝居／二人の王子」

――犬は吠えるが、キャラバンは進む。

芝居のこととなると目の色が変わったもんよね。

誰のことって、マルの話よ。

ああごめん、何か飲む？ まだいい？ あたし、カンパリソーダ。すみませーん。

当時ってまだ小劇場ブームっていうかさ...マルもキャラメルボックスとか？ 好きだったみたい。

もう語る語る。全然ついていけなかった、誰も。芝居の話になるとね。

あたしはさー、そういう雑誌見たりするの、好きだったから。

別にあたしは芝居好きってほどでもないなー、なかったな。

でもマルが芝居の話始めると、大抵の子は、えっわかんないーってなるから。

あたしだって詳しくないけど、知ってる範囲で話合わせてたねえ。聞き役ってか。

それで、あいつら付き合ってるんじゃないの、とか思う人もいたってことかもね。

部活もさ...演劇部って名前掲げてはいたけど、真面目に芝居やってたのって二、三人でしょ。

マルも、まあ真面目にやってた方か。くだらない遊びもあいつが率先してたけど。

あたしは、全然。遊ぶ方だけ。なんかああやって集まって意味なく騒ぐのが楽しかっただけ。

コンクール前とかだとさすがにね、裏方の手伝いしたりしてたよ。遊びついでだけどね。

興味なかったもん、お芝居とか。基本的に。

それで一回、変なこと、あったなあ。

いっこ下で、すごい可愛い女の子がいたの覚える？ ちっさくてさ。お人形さんみたいなの。

その子に怒鳴りつけられたんだよねー。あなたは、ずるい。って。

上背あって声が通って存在感があって、あたしたちが努力しても持てないものを最初から揃えてる。

それなのにあなたは何もしない。努力しないで、遊ぶだけ。

そうやって目の前をうろうろして、マル先輩の気をひいて、あたしたちのことバカにしてるとしか思えない。...ってさあ。

被害妄想だよねえ。

背は高いけどさ、遺伝だよ。ただの。声だって子供の頃剣道やってたせいじゃない？ 別になって感じ。

なんで怒られたのかなあ...前後の流れとか、思い出せないんだよね。うーん。

マルのこと好きだったのかなあ、あの子。

まあ確実に手はつけられてるでしょうね。マルのことだから。

って、こういうのが良くなかったのかなあ。あいつのことは良く判ってる、みたいなあたしの態度が。

でも今更しようがないよね。

悪かったとは思うよ。いろんな人に。

*

少女の読み上げる物語。

――昔むかし、または遙か未来のことです。

――ある大きな国の、大きなお城に、二人の王子様が住んでいました。

少女の語りに合わせて、舞台の両袖から二人の王子が現れる。

一人の王子は犬をモチーフにした衣装、

もう一人は猿をモチーフにした衣装を身に着けている。

犬の王子が言う。

――この冬が終わったら一人前の大人になる私。

――そうなる前に、一度自由気ままな旅をしてみたいと思う。

――なに、すぐに帰ってくるさ。

猿の王子が言う。

――兄さんが旅に出るのなら私も旅立とう。

――でも一緒では気ままな旅の邪魔だろうから、兄さんとは逆の方向に。

二人の王子はそれぞれに舞台を歩き回って、遠くまで行く見立て。

少女は二人を楽しげに見守る。

マントの人影がそれらを見て、口出しする。

――何ものにも縛られない自由な身の上になって当てもなく旅をする。

――若者にだけ許された、少しだけ不安な楽しみですが...

舞台の両袖から、新たに二人の人物が現れる。

影の台詞は続く。

――王子様たち、気をつけて！

――十二月には、大人たちはみんなとっても忙しい。

――大人に取りついて仕事をするはずが、あんまり忙しい者の背中から振り落とされてしまった

…

新たな人物の一人は白い衣装、もう一人は黒い衣装。

――天使と悪魔が、子供たちの隙を狙ってうろついているから。

第四章

「決別／天使と悪魔」

——何を言ったってムダさ。

ねえねえ、ワイン飲まない？ 飲もうよー。赤がいいなあ。
クリスマスだから赤でしょ。意味わからないって？ でも赤でしょ。

お芝居ね……まったく興味なかったわけじゃないのね。私も。
でもさあ、なんだか恥ずかしかったのよ！

何ていうの？ 自分はこれが好きだ、とか今これを頑張ってる、とか
そういうストレートな姿勢を周囲に見せるのが、すごく。
自意識過剰だったのよ！ もう、超、自意識過剰！
夢とか情熱とかよりもプライドが大事だった。笑うよね。
どういう物事にもとりあえず「ふーん、それで？」みたいなスタンスでないと
自分を保てなかったのさ。まったくくだらないさあ。

でもねえ、脚本。書いたことあるんだあ。一本だけね。
十二月の使者、っていう題だった。要はクリスマスの話だったね。
今思い出すと脚本の形になってなくて、小説と脚本の間をとったような変な体裁の。
しかもボツった。
いやみんなに読んでもらってボツったんじゃなくて、自分で、こりゃダメだわ、って引っ込めたの。

脚本ね。
元もとは授業中にヒマで落書きしてたのを脚本っぽくまとめて、
うん、三年だったけど、センター試験回避してたし余裕こいてた。
それでマルに読ませたんだよね。
そしたらさあ。意外と好感触だったよー。

お前これ面白いよ、短いけど少し場面増やせば、使えるよ、ってさあ。
上演しよう。一緒に手直しして演出も二人でやろう、って。
なんか興奮してたね。笑えたね。
あと、サンタクローズの役は絶対お前やれ、って。

即座に断りましたよお。

だっ、だからさー、なんか恥ずかしいって。

無理だって。できないって。

大体そんなつもりじゃないもん、ヒマだからふざけて書いただけだもん。

そう言って断ったらねえ、あいついきなりものっすごい不機嫌になってねえ。

それじゃ、お前とのコンビもこれで解散だな。

受験も近いし。

って。

おかしいよねー！

コンビ組んだ覚えなんかないっつもの。お笑いか！ っつうの。

本当、参っちゃうよね。

よく覚えてないけど、それからマルとも疎遠になってったのかなあ。

実際、受験、近かったしね。うん。

あ、ワイン、来てんじゃん。

飲もうよ。ねえ。

*

クリスマスの天使と悪魔が、舞台の片隅で立ち話。

――俺ら今年も仕事にあぐれちまったな。

――ああ、困ったな。人間たちの運や不運、カタカナで言えばラッキーとアンラッキーを

――一年の終わりにうまいこと調節するのが、俺らの仕事なのにな。

――近頃、年の瀬っていうと、どうにも忙しい人間が多いから。

――脇目も振らずに仕事して、急いでる奴の背中には、

――取りつくしまも、ありゃしないって。

一方、旅に出た王子たちは、

それぞれ別の場所で座って一息ついているところ。

天使と悪魔が彼らを見つける。

――おっ、ヒマそうな人間を二人見つけたぞ。

――やめとけよ、あれはまだ子供だ。

――構うもんか。見たとこ、もうすぐ一人前だろ。

――知らないぞ。

こうして天使が犬の王子、悪魔が猿の王子にそれぞれ取りつき、少女の読んでいる物語に次々と勝手な変更を加える。

その為、王子たちの身にさまざまな災難が降りかかる。

最後には天使と悪魔のいい加減な思いつきによって、二人は決闘することになる……

天使と悪魔の話。

――やっぱりさあ、決闘って言ったらあれだろ。

――一人のお姫様を巡って争うっていうのが盛り上がるだろ。

――誰か手ごろな姫はいないか。

――おっ、いいのが一人いるぞ。

—やめとけよ。本の外の人間だろ。

—構うもんか、すっかりこの本の世界に入り込んでいる。

—知らないぞ。俺の責任じゃない。

本を読んでいた少女が、お姫様役として舞台上に引きずり出される。

天使と悪魔の立会いの下、二人の王子は剣を交える。

王子たちの激しい争い。

紙の鎖がちぎれ、星やろうそくが転がる。

姫になった少女、おろおろしてマントの人影に助けを求める。

――どうしてこうなっちゃったの？ どうしたらいいの？

人影は言い放つ。

――ここは自分でなんとかしないとイケないよ。

王子たちの争いはなおも続く。

天使と悪魔は面白がって二人に加勢し、舞台を駆け回る。

天使と悪魔がぶつかったせいで、ツリーが音を立てて倒れる。

少女、持っていた本をぴしゃりと閉じて、

ついに怒り出す。

――みんな、いい加減にきなさい！！

少女の気合に吞まれて、四人の動きが止まる。

――今夜はクリスマスイブなのよ。みんなが、身近な人や大事な人と仲良く過ごす夜なの。

――あなたたち、兄弟でしょう。仲良くきなさいな。

犬の王子と猿の王子は我に返し、

仲直りして手を取り合う。

天使と悪魔はこっそりと舞台から去ろうとするが、少女に呼び止められる。

――王子たちを争わせたのは、あなたたちね。そこに座りなさい！

――クリスマスイブを厳かな気持ちで過ごそうと思ってたのに、何なのこのドタバタは。

――仕事ですって？ これが仕事なの？ 途中から明らかにふざけてたわよね。

平謝りする天使と悪魔。

――調子にのってました。すみませんでした。

――俺の責任じゃな...はい、すみませんでした。

少女、舞台の中央に出て、独り言。

――さて、これからどうしたらいいのかしら？

――兄弟喧嘩は終わったけれど、舞台の上は散らかり放題。

――言いつけられた仕事が出来てない、あの二人だってかわいそうだし。

――何よりこれじゃ、お話としてうまく終われないじゃないの...

天使と悪魔が、おずおずと申し出る。

――あのう...。サンタクロースが来てくれるかもしれません。

――クリスマスの、今の時期は、サンタクロースが仕切ってるんです。

――ただ、どこにいるのかはちょっと判らない。

――これだけの揉め事、向こうから来てもおかしくないんですが。

――でもサンタクロースが来れば、何とかなるんじゃないかと...

――何だか頼りない話ねえ。

少女は腕組みしてちょっと考え、やがて口を開く。

――じゃあ、みんなで呼んでみましようか。

――子供の頃のクリスマス会では、みんなで、サンタさーん！ って呼んだら、サンタクロースが来てくれたわ。

――きっと来るわよ。試してみましようよ。

少女の周りに王子たちと天使と悪魔が集まる。

――じゃあ、呼ぶわよ。せーの。

――さ、サンタさーん...？

――もっと元気よく。

――サンタさーん。

――もっと楽しげに！

——サンタさん！！

薄暗くなる舞台上に、サンタを呼ぶ声がかたまる。

第五章

「白状／サンタと少女」

——僕たちは偶然に気づく。

酔ったかも。うわ、酔ったかも、あたし。

いや、そんな飲んでないよね。やっぱり酔ってない。

実をいうとさあ、昨日、新幹線で東京から帰ってきたんだけどさあ、途中でマルに会っちゃったのさ。ローカル線から一緒だった。

うん……少し話したよ。

知らなかったんだけど、マルも地元から出てたんだってね。

大学卒業してから、専門学校行ったりして。演劇は続けてみたい。

でも、身体壊しちゃったんだって。病気したって。

それで今年から実家に帰ってるって、言ってた。

見た感じは元気そうだったけど。でも聞けないよ。身体壊したってどのくらい？ やばいの？
なんてさ。

うん本当、様子としては変わりなかったよー。相変わらずだった。マルだった。

でさあ。十年ぶりくらいにたまたま会っただけだったのに、言うんだよ。

俺さ、病気して思ったな、って。

いつどうなるか判らないもんだなーって、しみじみ思った、って。

夢とかやりたい事とかを、ひそかに暖めたりしてる場合じゃないのかもな俺。とか。なんかそんなこと。

それでね。言われたんだわ。また一緒に芝居やらねえ？ って。

また、ってねえ。何もしてないってのにね。とは、言えなかったけどね。

こんな田舎でも、お前とならやっていけそうな気がする。

ってプロポーズかよ！

とは、言えなかったけどね。

あ、あたし？ 無理だって。ダメだって。

でも、そんだけ言われて即座に無理ですもひどいなーと思って。ちょっと考えさせてって、それ

で逃げてきちゃった。

うん、あたしまだ東京に住んでるけど。

ここだけの話、仕事辞めようかと思ってて。

今年、会社潰れちゃったんだよね。潰れたたって、いろいろ仕事はあるんだけど。

でもちょっと何か厳しくなってきたってさあ。両親も帰ってきて仕事探せばって、言うし。

だから、やれないことはないけど、マルの言う芝居。

いや、でも、どうだろ、あたし。無理なんじゃないかな。うーん。

だってさあ……。

うーん。

……

えっ、電話？ かけるの？

誰に……マルに？

ちょっと、酔ってるでしょー。あたしも酔ってるけど。

嫌だよ、あたし、出ないよー。話すことないよ。

無理だって。ダメだって。

えっ、マジで？

やめてって。

出ないって。

本当？

えっ。

でも。

*

サンタを呼ぶ声のこだまする舞台。
やがてひそやかな鈴の音が聞こえてくる。

――しんしんと、皆に等しく雪が降り積もりますように。
――清しこの夜。

――誰しものが、小さな願いや希望を胸に眠り、
――それらの叶えられる朝を信じるのが許される。

――そんな夜で、ありますように。

――そう、誰しものが...

鈴の音に誘われるように、マントの人影が再び舞台に現れる。
やがて大きく響き渡る鈴の音。

人影がすっと腕を広げると、
舞台上にさらさらと雪が降り始める。

散らかったツリーや飾りたちは白い薄布で覆われて、
舞台はすっかり雪景色に変わる。

――私を信じて求める者の前に、いつでも私は現れよう。
――それが誰であってもね。

雪に驚いている少女たちの目の前に出ると、
人影はマントをひるがえし、
表と裏を逆にして素早く着なおす。

マントの裏、及びその下の衣装は真紅。
白のファーとレースであしらわれた模様は、雪を思わせる。

――あなたがサンタクロース？

少女が赤い人影の前に進み出ると、

――そうよ。

人影は仮面をかなぐり捨てる。

その素顔は女性。

――よくがんばったわね。

サンタクロースの登場に、皆、手を取り合って喜ぶ。

――本当に来てくれたんですね！ 願いを聞いてもらってもいい？

――もちろんよ。

――この人たち、これからどうしたら良いか判らないの。元の物語に戻してあげて。

――わかったわ。

サンタクロースの言うとおりに物語が修正される。

犬の王子と猿の王子は仲良く城に帰る。

天使と悪魔は、来年から真面目に働くことを約束してそれぞれ元いた場所に戻る。

そして舞台には少女とサンタクロースだけになる。

サンタは少女に尋ねる。

――あなたは どうしたい？ ずっと物語の中にいてもいいわよ。

少女は首を振る。

――ううん、お家に帰るわ。

――とっても楽しかったけど、夢は夢のままのほうがいいもの。

サンタは微笑む。

――いい子ね。

――もう子供じゃないわ。

どこかでピアノが優しいメロディを奏でている。

――でも、サンタクロースは、いるのね。

――そうよ。また来年、会いましょう。

――ええ。おやすみなさい。

――おやすみ。

少女はソファにそっと横たわる。

サンタがその上に毛布をかけて、

真紅のマントを波打たせながら立ち去る。

舞台が暗くなる。

第六章

「会話」

——そしてすべてわかるはずさ。

(携帯電話を受け取ると同時に、ちらちらと雪が降ってくる。)

も、もしもし？

どうも、昨日はどうも。

うん。

そうなの。

……そう。

あたしもよ。

うん、わかった。

やってみる。

いえ！

こちらこそよろしくお願いします！

って、プロポーズかよ！

そんなんじゃねーよ！！

ううん、大丈夫、なんとかする。

そうなの。

うん。

……

……

(降ってくるのは、紙の雪。)

それでね。

.....

そうなんだ.....

(徐々に辺りが暗くなる。)

.....

...

第七章
「カーテンコール」

――夢うつつ、かきわけて。

紙の雪はまだ降っている。

――本日は、ヒイラギ高校OB劇団によるクリスマス公演

――丸瀬ユキヒト 作・演出「07×97 語る女と十二月の使者」をご覧くださいまして、誠にありがとうございます。

――よろしければお手元のアンケート用紙にご感想をご記入くださいますようお願い申し上げます。

――現金以外のお忘れ物にご注意の上、どちらさまもお気をつけてお帰りくださいませ。

薄っぺらい調子の90年代らしいポップソング、
またはビートルズの「get back」が大音量で流れ出す。

女は椅子から立ち上がり、登場人物を紹介する。

少女、
犬の王子、猿の王子、
天使、悪魔、と順に現れて、一礼する。

最後に女が中央に立ち、
コートをひるがえすと
その下は赤いマントの衣装。

女は紙の雪を浴びながら
劇中劇のサンタクロース姿で微笑む。

――それではごきげんよう、良いクリスマスを！

全員が改めて一礼する。

幕が降りる。

劇終

(了)